

滋賀県指定有形文化財甲良神社本殿保存修理工事について

上席研究員 古荘 貴也

1. はじめに

甲良神社本殿は、令和4年度に耐震診断を行い、令和5年7月から令和6年3月で保存修理事業が完了した。当協会ではこの工事の耐震診断及び設計監理を行ったので、その概要について報告を行う。

2. 甲良神社の概要

大正15年の「郷社甲良神社宮繕要記」によれば、元龜、天正の兵火により古記録一切を焼失したと伝え、創立沿革は明らかでない。祭神についても同要記には伊邪那岐命、伊邪那美命及び健甕須佐之男命の三神とするのに対し、「甲良神社記」には上高甲は竹内宿禰、下高良は高良玉垂命也とし、応永31年京極三郎次郎小輔持高がその領地蒲生郡弓削郷に勧請鎮座し、その7代末甲良三郎左衛門は永正15年弓削郷より当地に遷座、それより5代末多賀豊後守宗広（一説に甲良即ち高良姓）は慶長9年社殿を修造したとしている。この記録は末尾に「永和5己未歳臘月仲院神人多賀三郎康清敬白」とあるが、永和という年号はなく干支及び文中の年代から推して元和を誤写したものかと考えられる。

甲良神社の所在地は現在甲良町大字法養寺というが、かつては東甲良村大字法養寺と称し、また同町大字尼子（旧名、西甲良村大字尼子）にも甲良神社と称する神社があって（権殿は寛永11年の再建で、重要文化財である）、その社記（明治初年）には、天武天皇の代に高市皇子命の生母尼子娘が当地に住むに当たり、筑後国高良明神を勧請したのに始まり、長祿2年には社殿炎上のことがあったと記している。

これらの社記はいずれも新しい記録で、両甲良神社の関係を明らかにすることはできないが、神社には兆殿司筆（室町初期）と伝える絹本着色釈迦三尊の画像を蔵し、裏面に承応2年の墨書銘があって、法養寺御宮御本尊也としていることから、江戸時代には、法養寺の鎮守として祀られていたことが考えられる。



図1 甲良神社位置図

3. 本殿の概要

構造形式 一間社流造、檜皮葺

本殿は一間社流造で、身舎斗供は出組で支輪をつけ、中備は臺股で、その中に牡丹唐獅子、菊あるいは牡丹の彫刻、向拝のものは波に龍の彫刻を入れている。向拝柱は7寸角で約5分6厘の四面取り（8分取り）とし、斗供は連三斗、その捨斗は龍と象を折衷したような彫刻木鼻で受けられている。妻飾りは扱首組みで扱首束幅8寸、扱首棹幅4寸1分。身舎正面は小脇柱をたて幣軸板扉構え。内部は内外陣境を板扉構えとしているが、すべての材料が最近のもので、当初は1室であり、天井は鬼斗で天井桁を支え、それに桁行2本の棹縁天井を張る。

本殿の建立年代は、棟札、墨書などの史料はないが、臺股、身舎頭貫木鼻の線形などは比較的古式を示しており、江戸時代初期寛永年間(1624～1643)頃のものと思われる。浜床廻りに後補材が認められるが、全体に当初材をよく残していて、江戸時代初期の本殿建築の好例である。なお、屋根鉄板葺は昭和41年に従来の檜皮葺の上に覆葺を施したものである。

本殿は建立後、屋根・軒廻り・浜床の修理を受けているが、軸部、組物、妻飾りは当初材で比較的保存状態が良い。

建立後の主な修理は、『滋賀県指定有形文化財甲良神社本殿修理報告書』によれば、明治28年に本殿地盤の地上げと本殿の部分修理、大正15年に本殿の浜床、しぶき除け修理及び周囲の土塀修理等、昭和15年頃に屋根葺替（古老談）昭和41年に箱棟、鬼板等と軒付はそのままで、平葺檜皮をめぐりとして亜鉛鍍鉄板覆葺したとある。昭和49年11月13日滋賀県指定有形文化財（建造物）に指定され、昭和56年度には滋賀県文化財保存事業で屋根葺替及び部分修理が実施され、現状変更の許可を受けて、屋根の鉄板葺を檜皮葺に復している。

4. 工事概要

(1) 破損状況

昭和56年の修理から42年が経過し、軒付、品軒の各所に腐朽・破損がみられる。特に西面は応急的に鉄板を被せ維持管理されていた。

柱は身舎丸柱4本のうち3本が沈下しており、最大21mm沈下が生じていた。縁廻りや箱棟にも腐朽が部分的に見られた。

(2) 工事内容

耐震診断及び屋根葺替・部分修理、耐震補強。

令和4年度に建造物の耐震診断を実施し、耐震補強が必要という結果が出たので、身舎床下4面の内部に両筋違を設置することにした。

令和5年度は屋根こけら葺の全面葺替えと、以下の部分修理を行った。

縁、浜床廻りの解体修理や、軒廻りと箱棟の修理。亀腹および犬走りの漆喰叩き修理等の基礎工事。柱の不陸調整や、腐朽破損木部の修理。鬼板と箱棟の銅板包み。正面軒樋や背面軒樋・豎樋の修理等。小屋組内部・床組の防腐防蟻処理、修理名札の取り付け。付帯工事としてしぶき除けの修理。

また、工事中の落雷により自動火災報知機及び受信盤が壊れたため、全て取替え、新たに自立型の総合盤を本殿透扉外に設置した。

身舎柱の不陸は、正面から見て手前左柱を基準とすると、右奥は21mm沈下していた。亀腹の割れは見られず、礎石の沈下も見られないので、柱下に飼木等を入れて調整した。

床下補強では、柱が丸柱なので枳材は丸柱にすり合わせて加工し、筋違を取り付けた。

亀腹下地は三和土で固められていたが、通常より硬く、石灰分が多めに入っていたと思われる。また、中塗りは45mmの厚さを一度で塗られていたが、同様に1回塗りにする場合は石灰を多目に入れる必要があるので、本工事では一般的な三和土の配合で2回に分けて施工した。

箱棟、千切、勝男木は銅板で包まれていたため健全な部材が多かったが、千切を取り付けるボルト廻りに水が廻っていたので一部新調した。

おわりに

本稿作成にあたり、甲良神社及び工事関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。



図2 屋根修理前



図3 屋根野地修理前



図4 亀腹 竣工



図5 現場見学会、檜皮葺き体験



図6 千木腐蝕状況
右下部材が交差部で折損している



図7 箱棟 竣工



図8 床下筋違補強



図9 自立型総合盤

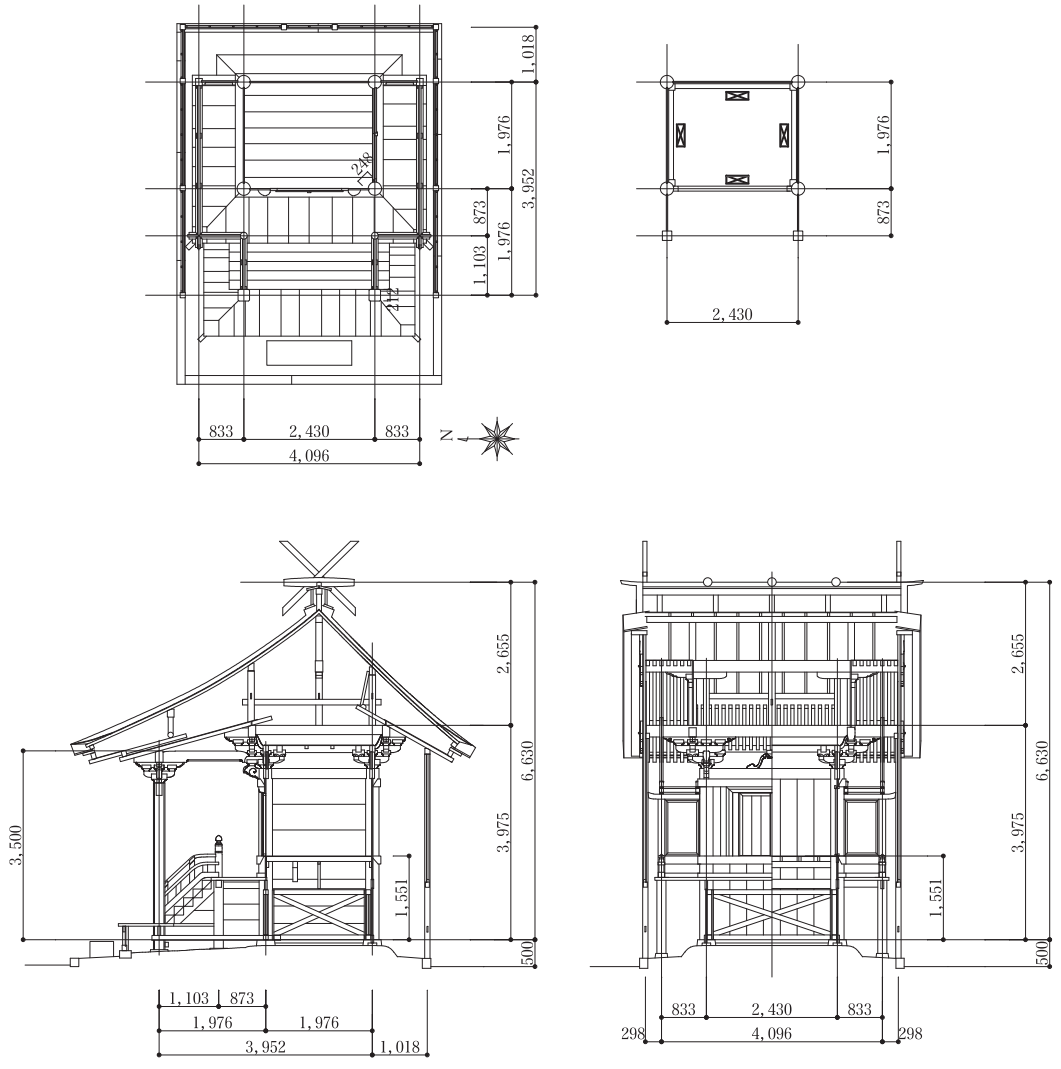


図10 甲良神社本殿 平面図、補強配置図、梁間断面図、桁行断面図